

れは豊富なる新資料を網羅した新しい「朝鮮美術史」の出現を、待つこと久しくして未だその望を果たさない現狀に於いて、本書の刊行は單なる記念的出版としてではなく、大いに讀書界を益すべきものあるを疑はぬ所以である。

なほ、本書の各篇の形成については、博士の遺された類似の諸論文申よりそれら詳細なる部分を採取し、決定版の作成ともいふべきものとした編者藤島亥次郎氏の多大なる努力がはらはれてゐることを附記すると共に、資料の關係であらうが、既刊の二卷に比してや、印刷の不鮮明さが感じられることを書肆に對して特に本書の爲に惜しみたい。(菊版七五八頁、圖版十二頁、定價七圓、岩波書店發行)(小林行雄)

# 彙報

## 東洋史談話會

例會 九月二十七日(土)午後一時半より樂友會館第六號室に於て開催、那波教授、宮崎、田村兩助教ほか學士、學生多數出席、左の講演をきく。

- 北支と中支 日比野丈夫氏
- 楊貴妃の素性について 岡本午一氏
- 十月九日(木)午後六時半樂友會館第六號室にて開催。
- 女國と蘇昆 佐藤長氏

支那に於ける孝道と佛教 宮川尙志氏

## 東方文化研究所公開講演

東方文化研究所に於ては今學期に入つて左の講演を行つた。場處は同所講堂。

十月十一日(土)午後一時半より

五臺山の現在と過去 助手 日比野丈夫氏

唐代曆法に及ぼしたる西方の影響 研究員 藪内清氏

## 西洋史讀書會

例會 昭和十六年度第三回例會を十月八日午後六時より樂友會館開催、原教授、井上、前川の兩講師を始め參會者二十五名。

1' Rosfozkef: Social and economic history of the

Roman Empire. 二回生 市川承八郎君

1' F. Meinecke: Vom geschichtlichen Sinn und

vom Sinn der Geschichte 中山治一君

## 地理學談話會

例會 十月二十五日(土)午後二時より實習室に於て開催、出席者二十八名。

- 一、一回生旅行報告
- 蒙疆 伴豐氏
- ボナペ島 川喜田二郎氏
- 一、興亞地理教育私見 吉田敬市氏

一、中部ユーラシアの意義(其の概観) 中田榮一氏

評議員 小川琢治博士計

本會評議員、京都帝國大學名譽教授、理學博士小川琢治氏は、古稀を祝はれて後も益々學鑠として學事に盡瘁せられつゝあつた處、昭和十六年十一月十五日午前十一時十五分自邸に於て溘焉として長逝せらる。邦家の爲め學界の爲め洵に痛惜の極と言ふべく謹で茲に哀悼の意を表する次第である。越えて翌々十七日午後二時より黒谷本坊に於て告別式營まれ、朝野の名士多數の參列あり諸人哀悼のうちにも盛儀であつた。博士の履歷偉勳並に論著その他は本誌次號に掲げて御生前の學德をしのぶ豫定である。

會 報

◇會員 動靜

◇入 會

京都市左京區松ヶ崎西櫻木町一五

(右小牧實繁氏紹介)

京都市左京區北白川平井町二三

京都市杉並區高圓寺七ノ八九四 深志寮

京都市東區帝國大學文學部西洋史學研究室

京都市本郷區動坂町三六八番地

藤野 義明氏

高山 岩男氏

秀村 欣二氏

矢田 俊隆氏

金澤 誠氏

京都市目黒區柿ノ木坂四三

京都市中野區千光前町一〇

京都市世田谷區成城町

兵庫縣武庫郡御蔭町兼安

(井上智勇氏紹介)

◇轉 居

京都市左京區吉田中大路町三四ノ八三清望館内

大阪市西成區西皿池町二四

京都市左京區吉田中大路町三十一ノ一

◇寄贈交換圖書 (十月現在)

三浦 一郎氏

倉橋 文男氏

成城高等學校圖書館

堀米 庸三氏

加賀谷 邦夫氏

田中 勝藏氏

藤岡謙二郎氏

東方學報 東京十二ノ二

長崎談叢 二八

蒙古學古 八ノ九・十

中國文學 七六

歷史と國文學 二五ノ三・四

會 報 二一

無 關 之 誌 五五・五六

歷史學雜誌 五二ノ九・十

社會經濟史學 七八ノ三・四

人類學雜誌 一ノ六

文學院雜誌 五六ノ八・九

史迹と美術 八ノ九

社會學徒 四七ノ八・九

和紙研究 九

臺洋史研究 六ノ四

歷史學研究 六ノ四

哲學研究 十一ノ八

國民精神文化 二六ノ八・九・十

東方文化學院

長崎史談協會

善隣學協會

中國文學研究會

中央文化研究會

中央文化研究會

むかし學會

日本歷史地理學會

社會經濟史學會

東京人類學會

東京帝國大學文化學會

東北帝國大學

史迹・美術同政會

社會學徒會

和紙研究會

臺北帝國大學會

臺洋史研究會

歷史學研究會